

教えて!

市立病院

〈第 88 回〉

多関節腹腔鏡鉗子を使った手術

■問合せ／市立病院総務課企画財務担当 ☎ 22-2450



〈今月のドクター〉

外科部長兼内視
鏡外科長
佐藤佳宏 医師

皆さんは、ロボット支援手術という言葉聞いたことがあるでしょうか。この手術は米国を中心に世界中で導入され、特に泌尿器科、婦人科を中心に急速に普及し、欧米では一般・消化器外科で増加しています。

イタリア、ルネサンス期の芸術家・発明家を想起させる名前のシ

ステムが有名ですが、ロボット支援手術は内視鏡下手術であるため、開腹手術に比べて患者の負担が少なく、高画質3次元画像を利用できるのが特徴です。また、人間の手指や手首の動きを模倣する鉗子や、実際の手の動きよりも最大5分の1まで縮小して動かすことができる縮尺機能により、直感的で繊細かつ複雑な操作が可能になるといった利点があります。一方で、触覚が得られないことや、手術機器導入費や維持費、使用するメスや鉗子などが高額であるなどの課題もあります。

昨今、ロボット支援手術に近い手術の質を目指した「多関節腹腔

鏡鉗子」が日本の薬事承認を受けました。この鉗子の利点として、先端が人間の手首の可動域より広い360°回転し、深いところにスムーズに入ることや、ロボット支援手術では得られない触覚が得られること、通常の腹腔鏡手術の鉗子として既存の手術システムに導入できることが挙げられます。

当院では、この多関節腹腔鏡鉗子を導入し、令和2年2月から8月の間に、胃・小腸・大腸腫瘍に関する計3例の手術を行っています。腹腔鏡下手術症例全般に使用できますので、今後は胃や直腸などの難度の高い腹腔鏡手術に応用していきたいと考えています。